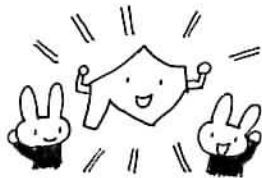




発行：NPO 法人 北海道食の自給ネットワーク  
〒065-0015 札幌市東区北15条東18丁目2-17 (有)ワードエム内  
TEL：090-2818-5502 FAX：011-789-8890



## 北海道が目指すべき農業とは

—TPPの時代に北海道の持つ可能性を考える—

ルポライター 滝川 康治

### 《環境保全型農業や地産地消の課題》

農畜産物の関税撤廃をめぐる論議が盛んだが、TPP(環太平洋経済連携協定)に参加するか否かに係わらず、北海道農業の担い手不足は避けられない。この20年間で農家戸数は半減しており、今後、農村人口が確実に減っていくとの予測もある。

私の暮らす15戸ほどの集落は典型的な中山間地であり、専業農家が多い。ハウス野菜や餅米、小麦などの畑作物、酪農を手がけ、新規就農者も1戸。「年寄りが亡くなり、あと10年すると何軒になるかな…」「いや、逆に入ってくる人もいるはずだよ」。元旦恒例の新年会で、そんな話が行き交った。

1960年代以降、離農者の土地を求めて規模拡大が進んだ。今後は「法人経営を含む大規模農家」と「小規模でも個性のある農家」の二極分化がより進むだろう。どちらのタイプも欠かせない(私の好みは後者だが…)。そんななか、これからの「食の自給」や地産地消の軸足をどこに置くのか—。

環境への負荷を少なくするために、有機農業やクリーン農業の必要性を多くの人が口にする。だが、有機農業の推進法ができ、4年前に道の推進計画がスタートしても、手続きが煩雑で経費がかさむなどの理由から、有機JAS認定農家はそう増えていない。景気低迷もあり、有機農産物の消費にお金を回せない人も多いようだ。生産と消費の両面から「推進計画」を検証する時期だろう。

クリーン農業の基準をクリアするのはそう難しくなく、登録集団は増加傾向にあるが、知名度が低い・農産物の価格アップにつながらない・「登録基準」を見せられても消費者には理解しにくい…と課題をかかえる。

北海道には大面積での環境保全型農業を展開できる可能性がある。現状を踏まえ、どう浸透させていくのか—いろいろな立場の人が一堂に会して議論する場が必

要ではないか。

北海道の食料自給率(カロリーベース)は200%前後と高く、生産量が全国一の品目も多い。その一方で、道外の大消費地に一次産品を送り、加工された製品を移入する植民地経済の色彩が濃い。家庭消費に占める道産品の自給度もさほど高くないようだ。

今後の10年で“植民地・北海道”からの脱皮をめざしたい。昨年、音更町の山本忠信商店が小麦の製粉工場をオープンさせた。長年、江別製粉が奮闘してきた道産小麦の普及に弾みがつく動きといえる。主産地の一つ、オホーツク圏に製粉工場があってもいい。

菜種油の地産地消にも弾みをつけたい。近年、滝川市や音更町などで栽培面積が少しずつ増え、生産拡大は難しい相談ではない。問題は、キャノーラ油(大半の原料は輸入の遺伝子組み換え菜種)よりも価格が高く、消費が伸びないこと。道を窓口に生産サイドの情報交換の場がつけられたが、流通関係者や消費者も交え課題の克服に取り組んでほしい。

### 《適正規模の農業を支える人材を》

酪農地帯に新しいフリーストール牛舎(牛を繋留しない大型牛舎)が目立つようになり、TMRセンターと呼ばれる飼料工場も増えた。だが、規模拡大をしても、輸入穀物に依存する限り、農家の所得はそう伸びない。逆に、適正規模で放牧酪農を手がける人のほうが健全経営を維持できる。

放牧は「アニマル・ウェルフェア(動物福祉)」に適った飼育方法でもある。そこで生産された牛乳や乳製品に価値を見いだす消費者が多数派になるなら、飼育方法を変えたいと考える農家もいる。双方が出会い、放牧酪農を復活させる道をめざせないだろうか。

東アジアへの輸出拡大を図るため、道内3地区に「フード特区」を設ける構想があるという。取り組むのは自由だが、

その前に道民みずからが地場の農畜産物加工に手を貸し、製品を口にする機会を増やすといい。

食料危機になっても農家は自給生活できるので、「食」は消費者自身の問題だ。地産地消を促しつつ、やれる人は自分で作物を育て、家庭の自給度を高めてはどうか。難しい理屈はいらない。今、新規就農や定年帰農を志す都市住民が増えている。多様な北海道農業を守り育てるために、皆さんのまわりにいる、そうした人々を農村に送り込んでほしい。

福島での原発震災によって、原子力と一次産業は共存できないことがはっきりした。今、深刻な汚染を免れた北海道で安全な食料を供給しつつ、泊原発の廃炉をめざすことが一人ひとりに求められている(発生した“核のゴミ”は「汚染者負担の原則」に基づき、北電の責任で道内に厳重保管すべきだ)。

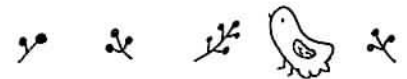
風土に生かされた適正規模の農業から得られる生産物は、工業的な農畜産物に比べ割高だ。所得水準の低い北海道では、そこがネックになる。TPPの本質は農業問題ではなく、自由貿易を口実にアメリカ流の基準を日本に押しつけ、より格差の大きな社会を生み出すこと。「人・モノ・カ

ネの自由化」でデフレが進んで給料が下がると、高品質・高価格の食料は買い控えせざるを得ない。そうした意味からも参加をやめさせる活動が大事だ。

北海道には生産者と消費者の交流や農産物の共同購入、トラスト、GM作物の反対運動、「コープさっぽろ農業賞」などの蓄積がある。経済評論家の内橋克人さんは「FEC(食料・エネルギー・福祉)自給圏」を築くことを提唱している。今までの実践を踏まえ、そうした自給圏を目標にしつつ、希望の持てる農業をめざしてほしい。

#### 滝川康治(たきかわ こうじ)氏プロフィール

1945年 北海道下川町生まれ。地元の農業高校酪農科を経て、和光大学人文学部中退。ローカル紙記者、酪農業などの後、フリーのルポライターになる。現在はルポライターの仕事の傍ら、農業にも携わっている。下川町在住。著書に『幌延―核のゴミ捨て場を拒否する』(技術と人間、1991年)、『核に揺れる北の大地』(七つ森書館、2001年)、『狂牛病を追う―「酪農王国」北海道から』(七つ森書館、2002年)など。



#### 生産者の 想い



#### 江別市篠津 農業 高橋 正行

新年を迎え、会員の皆様には健やかにお過ごしのこととお慶び申し上げます。

さて、小麦トラストも10年の節目を迎え終了することは寂しくもありその半面ほっとしている自分がそこにいます。10年前に小麦トラストの参加を打診された時、正直戸惑いもありました。小麦で消費者に何をどうアピールして理解を求めていけばよいのか自分としてはわからなかったのです。それから食の自給ネットワークの方々とは話し合いをしていくうちに、国産小麦を食べてみて、実際に圃場を見学して、実情を我々生産者に聞き、お互いに理解を深めながら国産小麦を食べ支えていく事の大切さを確認する。そんなことを、毎年繰り返すうちに今年はどうな人が見学に来てくれるか楽しみにもなっていたのです。最後の年まで参加して下さった方々に感謝！

今思うこと、それは10年ひと昔という言葉がありますが、この10年の間には自分自身にもいろいろな事がありました。42歳の厄年の夏に1ヶ月半の入院した時には地域の友人、同級生に協力してもらい、感謝の念と強い絆を感じました。5年前には地域の農家7軒で生産法人、輝く、楽しい、里、の意味を持つ「輝樂里」を設立。そして今年度で小麦トラスト終了と、色々あった10年で、私の人生でこれほど目まぐるしく動いた期間もなかったと思います。その中で小麦トラストを続けられたのは、自分のなかでトラストが占める意味が大きかったのだと思います。

昨年12月11日(日)クラビーサッポロで行われた小麦収穫祭&トラスト10年パーティーでは、今迄トラストに携わってくれた方々と再会したり、とても有意義なひと時でした。自分の中でこれが最後なんだと思うとさびしい気持ちでいっぱいでした。しかしトラストは、一定の成果を上げました。これからは個々がこのような食べ支えを実践し近くの人々に広げてゆく事がこの10年の間にトラストに参加された方の使命なのです。わたしはそう思います。トラストに参加して下さった多くの方々に感謝してこの文章を閉じたいと思います。有難うございました。



## メーカーさん紹介

今回はいつもの取材とは違い、メーカーさんご自身にトラストへの想いを書いていただきました。



江別製粉(株) 山口 小百合 (江別市)

大熊さん・養島さんに初めてお会いしたのは2001年の春。自給ネットで「小麦トラスト」を行うことになり、江別製粉入社1か月の私が活動を手伝うことになったのです。小麦は自給率が低い上、流通が複雑で生産者の顔が見えにくい。とはいえ、北海道では全国の生産量の6割を占め、輪作体系上も重要な農産物である。また、若い世代は小麦製品を好んで食べる。生産者と消費者が互いに作り支え、食べ支える「トラスト」運動にこれほどぴったりなものはないとのことでした。



スタートは翌年と決まり、早速準備開始。ところが、小麦をとりまく制度の壁・物量の壁・品種の壁・品質の壁・・・多くの壁に突き当たり、右往左往。そのたびに「小麦は見えにくいて、このことだったのか」と頭を抱えながら、社内外の方々に教を乞うたものです。この現状をわかりやすく伝えることが、小麦畑と食卓の距離を縮めることになるのだと使命感に燃えつつ、同時に、道産小麦の美味しさと関係する方々の魅力にすっかりはまっている自分がいて(笑)、無我夢中で初年度を迎えたことを思い出します。知らぬが仏で、関係者皆様には随分と無理難題を聞いていただきました(今思い返すと、顔から火が出そうです)

そんなヨチヨチスタートの小麦トラストも10周年。その後の着実な歩みを物語るように、ファームレターには、生産者さん、農協・役所の職員さん、加工業者の皆さんの誇らしげな顔が並んでいます。活動を支えるスタッフは、若い世代。弊社にはF-shipという設備ができ、生産者単位の小規模製粉が可能になりました。道産小麦100%の製品を扱うお店も増えましたね。当時存在したいくつもの壁がいつの間にか消えている、これこそがトラスト10年の成果としみじみ思います。さて、小麦トラストはここで一区切りですが、小麦の(日本の!)自給率は低いまま。皆さん、これからも道産小麦と道産農産物を、よろしくお願い致します!!



(株)サッポロ麵匠 専務取締役 山下 雅広 (札幌市)

2012年。これから道産小麦使用の商品は、何処へ向かうのでしょうか。数十年後に本当は各家庭の中に食文化と伝統の手づくり調理法が浸透し、イタリアの生パスタ、韓国の手づくりキムチなどのように各家庭の味として受け継がれ、その味には道産小麦が欠かせないといったそんな味に、歴史と伝統が加われば理想なのでしょうか。

ここからは未来20●●年1月。海外から孫が久しぶりに帰国。

「やっぱり、ばあちゃんの手づくり小麦トラスト麺は最高だね。正月はこれがないとね」

「あら、うれしいね。でもね、これは本当の味ではないんだよ。もう道産小麦も手に入らないからね。」

「えっ、じゃあ、この小麦はどこなの？」

「お前の働いている●●国の小麦さ。でも元々は北海道の小麦の種さ」

「なんだか複雑だね。自分の子どもにも家のトラスト麺の作り方を教えてもらいたかったのに。本物ではないんだね」

「ちょっと待ってよ。確か二階に当時の道産小麦の資料があるかも。」

そして箱を開けてみると、『小麦通信・北海道食の自給・・・』の文字の資料がありました。

「昔は、生産者・製造者・消費者が一体となって北海道の小麦産業を支えていたんだあ。この活動記録は、自分の今の仕事の参考になるよ」

時代の中の本質的な活動は、終わりが無いから繰り返すのでしょうか。それとも本質的であれば繰り返しながら、終わらせてはならないのでしょうか。そのために私たちが出来ることは・・・。

今年のお正月は自問自答のスタートです。





# 小麦を作ってパンとワインで乾杯を



## ～第3弾 小麦収穫祭&トラスト10年パーティー～実施しました

小麦トラストスタッフ 外所裕子

4月の種まきから8月の収穫と、続いてきた企画もいよいよ大詰め！パンとワインで祝う小麦収穫祭&トラスト10年パーティーが2011年12月11日(日)にホテルクラビー札幌で開かれました。当日は消費者、生産者、流通・加工業者、JA、市役所の方々総勢59名が参加し、大いに盛り上がりました。

受付には10年間この運動を支えてきた大熊さんと箕島さんが立ち、参加者一人一人とそれぞれ言葉を交わし、パーティーが始まる前から会場が和やかなムードに包まれる中、NPO法人北海道食の自給ネットワーク代表の藤崎さんの挨拶でパーティーがスタート。この方がいなくては小麦トラストが成り立たなかったと一同大感謝の江別製粉(株)常務取締役 佐久間良博氏から10年間の思い出と共にトラストの終結を惜しむお言葉をいただいた後は、15品もの美味しい料理を作ってくくださった清水シェフによるお料理の紹介。曰く、「食材に力があるので、あまり手を加えず最小限の調味料で作った」とのこと。料理への期待が膨らむ中、トラスト創設の立役者であるJAみねのお専務理事 森川和徳氏の発声により、岩見沢の宝水ワイナリーのロゼワインで乾杯し、お待ちかねの会食タイム！参加者は皆、綺麗に盛り付けされた美味しそうな料理を前にとっても嬉しそう。それぞれ気になる料理を各テーブルに持ち帰り、他の参加者と談笑するなど、思い思いの時を過ごしていました。そんな中で話題になっていたのはやはり、今回の会のメインテーマの1つである新品種「はるきりり」を使った生パスタとパン3種(食パン、カンパーニュ、バゲット)。「美味しい」やら、「いやいやうちの小麦の方が旨い」などと言いながら、興味津々で味わっていました。また、メニュー名の下には今回、このパーティーを開催するにあたって、ご自身の畑でとれた食材を提供していただいた方の名前が入っており、お顔を思い浮かべながら感謝の気持ちを持っていただきました。ああ、これが本当の意味での顔の見える関係なんだと改めて地産地消の良さを肌で感じた一コマでした。



食事の後は10年間の思い出が詰まったスライドショーの上映。トラストの歴史を思い、懐かしいような、少し寂しいような気持ちになりました。その後はトラストを支えてくださった生産者、流通・加工業者、JA、市役所の方々の紹介や消費者への突撃インタビュー。トラストに関わったことを財産とし、その活動の終了を惜しんでくださった上で、トラストがなくなっても意識して地域の産品を買い支えて欲しい、という意見が多く聞かれました。



お楽しみコーナーでは江別製粉の佐久間さんと演奏仲間お2人によるジャズの生演奏を2曲。賑やかだった場が一気にしっとりとし、その音色の美しさに皆さん聞き惚れていました。その後は小麦クイズ。小麦のプロである生産者やメーカーさん達には釈迦に説法。ドキドキしましたが、温かく見守りつつも皆さん本気で順位争いをし、大盛り上がり。1位～3位までは代表の藤崎さんから豪華景品の授与があり、大変喜んでいただきました。最後は長年トラストに関わり、繁忙期の北見から駆けつけてくださった(有)ティンカーベル代表 柏倉一敏氏から挨拶をいただきトラスト10年&収穫祭パーティーは盛況のうちに無事終了しました。



今回、改めて小麦トラスト運動は消費者、生産者、流通・加工業者、JA、市役所、農業改良普及センター等、たくさんの方々を支えられて10年間続けてこられたのだと強く実感する1日となりました。大変ありがとうございました。



★トラストへのご意見感想をお寄せください。 FAX011-789-8890 Eメールinfo@jikyuu.net

(イラスト:菊地 よう子)